

子どもが学びをつなぐ道徳科学習

道徳科

貴島 美保
田中 聖二



研究テーマについて

1 深い学びのある授業のなかで見えてきた子どもの姿

昨年度までの研究をとおして、道徳科として以下のような姿が見えてきた。

- 道徳的な問題を自分事として捉える姿
- 教材の問題場面に対して、自分だったらどうするか等、様々な視点で考えていく姿
- 道徳的問題に対し、よりよい解決方法は何かと考える参考にするための材料を獲得し、蓄積していく姿
- 日常生活や道徳の授業の経験により、積み重ねてきた多様な見方や考え方を再確認していく姿
- 「考えていなかったことに気付く」「考えてきたことに確信をもつ」等の新たな価値観を生み出す姿
- 広く一般的な人々に承認を得られる自分なりの答えを導き出す姿

2 学びをつなぐ姿

教材に含まれる道徳的な問題を自分事として捉え、仲間との議論において、多様な価値観にふれ、自分の価値観を広げ深めるなかで、子ども一人一人が自分なりの答えを導き出していき、生活につなげ、よりよく生きていこうとする姿

総合的な学習の時間や生活科及び特別活動とかかわる資質・能力について

【総合的な学習の時間とかかわる資質・能力】

道徳科も総合的な学習の時間も自己の生き方を考えるための資質・能力につながる学習である。そのために、自らもった「問い」に対して、問題の解決に向けて探究するなかで、道徳的価値についてより深く理解したり、自己の生き方と関連付けて考えたりすることができることにつながっていくと考えられる。

【生活科とかかわる資質・能力】

生活科での、「自立し、生活を豊かにしていくための資質・能力」を育成していく過程において、自分と対象とのかかわりをとおして学んでいくための土台となるものは、道徳性である。内容や教材においても、生活科との特質を生かしたうえで関連付けていくことが、習慣や技能を実生活や実社会のなかで生きて働くものとするにつながっていくと考えられる。

【特別活動とかかわる資質・能力】

特別活動は道徳的な実践そのものの指導を行うこと、道徳科は道徳的な実践を行うために必要な内面的資質を養うことを目的としている。道徳科の授業で学んだ道徳的価値の理解及びそれに基づいた自己の生き方についての考えを、特別活動における実践活動や体験活動をとおして実感させたり、体得させたりすることや、特別活動での経験を道徳科の授業に生かすなど、両者の特質を生かしたうえで関連付けることで、よりよい自己の実現へとつながっていくと考えられる。

研究内容

1 「学びをつなぐ」姿を実現するための学習指導の在り方

- (1) 問題意識をもたせる導入の在り方
- (2) 子どもが学びをつなぐための授業の展開

研究内容の基本的な考え方

1 「学びをつなぐ」姿を実現するための学習指導の在り方

(1) 問題意識をもたせる導入の在り方

子どもが主体的に学びに向かうための出発点は、問題意識をもつことである。問題意識につながる道徳科における問題とは、道徳的価値に根差した問題であり、単なる日常生活の諸事象とは異なる。文部科学省教科調査官の浅見哲也氏は、道徳科における問題を大きく3つに整理している。「①子どもたちにとって身近で切実な問題（学校生活や家庭生活での子どもの様子を見た時に、学校のきまりが守れない、夜遅くまでゲームをしてしまい、朝、起きられないなどの問題）②社会的な問題や現代的な課題（いじめの問題、情報モラルの問題、持続可能な社会への発展にかかわる問題など、もっと視野を広げて取り上げたい問題）③教材の中に描かれている問題（昔の話や違う国の話、偉大な人物の生涯や功績等が描かれている教材をとおして考えていきたいことや子どもの日常でも起こり得る出来事が描かれている教材に含まれている問題）」である。

このような問題に対して、道徳科の授業を展開するなかで、教師が提示した出来事や子ども自身の日常生活で生じる疑問や困り感がきっかけとなり、子どもの問題意識へとつながっていく。問題意識をもたせるためには、本時の主題と日常や各教科等の学びを比べ、関連付けたり、相反する価値のどちらを優先すべきか順序性を考えたりするなど、発達の段階や内容項目、教材によって様々なアプローチの仕方があると考え。そこで本年度は、問題意識をもたせる導入の在り方について考えていきたい。

道徳科における問題

①子どもたちにとって
身近で切実な問題

③教材の中に
描かれている問題

②社会的な問題や
現代的な課題

問題意識をもたせる導入

- ・日常や各教科等の学びを比べ、関連付ける。
- ・相反する価値のどちらを優先すべきか順序性を考える。等

問題意識



(2) 子どもが学びをつなぐための授業の展開

道徳科の特質は、「一人一人が、ねらいに含まれる一定の道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく」ことである。

学習活動のなかで、「自己を見つめる」ことや「多面的・多角的に考える」ことこそが、道徳性を養うことにつながっていく。そのためには、指導方法を工夫していく必要がある。教材の提示の仕方や発問、板書等様々な工夫があるが、本年度は、「学びをつなぐ問い返し」の在り方と「子どもの思考を整理するための板書の工夫」について考えていきたい。

学びをつなぐ問い返しの在り方

授業を考える際には、必ず主となる発問を考え、授業で子どもに問う。発問に対する子どもの考えに対してさらに問い返しを行うことで、価値について立ち止まって考えるきっかけとなったり、仲間の考えと自分の考えをつなぎ、多面的・多角的に考えていくことへとつながったりする。前研究において、問い返しを含めた応答予想を行ってきたが、予想を超える子どもの考えが授業のなかで話し合われることがあった。授業において、目の前で発せられる子どもの思いや考えを教師が受け止め、柔軟に問い返しを行うことが、子どもと教材、子どもと子ども、子どもと教師をつなぎ、深い学びへとつながると考える。

子どもの思考を整理するための板書の工夫

学びを「見える化」することは、子どもの思考の整理へとつながる。板書は子どもにとって思考を深める重要な手掛かりとなるものであり、教師は明確な意図をもって板書の工夫を行わなければならない。教材の内容や登場人物の関係を構造的に提示することや子どもの考えをチャート等を基に表し、話し合いを行わせることで、思考が整理され、道徳的価値のよさや実現することの難しさ等に気付く手掛かりになると考える。

研究の実際

1 「学びをつなぐ」姿を実現するための学習指導の在り方

(1) 問題意識をもたせる導入の在り方

ここでは、「①子どもたちにとって身近で切実な問題②社会的な問題や現代的な課題③教材の中に描かれている問題」の3つの視点から子どもの問題意識へとつながる導入の実践を行った。

①子どもたちにとって身近で切実な問題

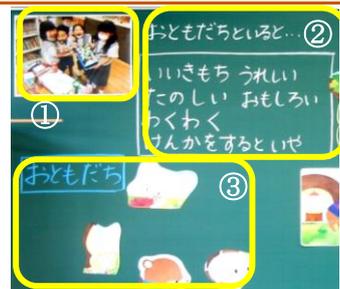
主題名：ともだちっていいな 教材名：ぞうさんとおともだち（日本文教出版）【友情、信頼】（第1学年）

子どもの
実態

子どもは、小学校に入学し、集団で生活していくなかで、「友達ともっと仲よくなりたい」という思いをもっている。また、「友達と仲よくなると嬉しい」等と友達がいることのよさを感じている。しかし、友達と喧嘩をしてしまい、嫌な思いをした経験のある子どももいる。

問題意識をもたせる導入の工夫

- ① 子どもが学校で友達と一緒に過ごしている写真を提示する。その後、「友達といるとどんな気持ちになるかな。」と問うことで、子どもの友達に対する価値観を引き出すことができるようにする。
- ② 友達といることのよさに対する思いが多く出た際には、「楽しい気持ちばかりなのかな。」と問い返すことで、友達といることによって楽しく過ごせていることや時には喧嘩をして嫌な気持ちになるなど、日常で感じている友達に対する多様な思いを引き出すことができるようにする。
- ③ 教材の登場人物同士が友達であることを伝え、「ぞうさんたちは、友達といるとどんな気持ちになるのかな。」と問うことで、友達について考えていくという問題意識をもてるようにする。



友達と仲よくしている写真を提示することで、友達とのかかわりを想像する姿が見られた。楽しく過ごしたり、時には喧嘩したりすることがあるという日常の友達とのかかわりを教材の登場人物とつなげて考えることができていた。

②社会的な問題や現代的な課題

主題名：正しいことは自信をもって 教材名：遠足の朝（日本文教出版）【善悪の判断、自律、自由と責任】（第4学年）

子どもの
実態

子どもの多くがドッジボールをして遊ぶ経験をしている。チーム決めや他のクラスの友達を入れるかどうかなどの問題が起こることもこれまでにあった。

問題意識をもたせる導入の工夫

- ① ドッジボールがしたい他のクラスの友達を、だれも仲間に入れようとしめない場面をイラストで提示する。
- ② 自分だったらどうするか判断を迫ることで、自分なりの考えをもつことができるようにする。
- ③ 判断に迷うという考えには理由を問うたり、「仲間に入れます。」という考えには、「周りを入れたくなさそうだよ。」と考えを揺さぶったりすることで、周囲の状況によっては、正しいと思っても言いにくいことがあることを想起させ、問題意識をもつことができるようにする。



いじめ問題につながる教材の内容と子どもの実態を基に、ドッジボールでの場面を提示し導入を行った。「自分なら仲間に入れるか」という問いに対し、「入れるべき」という考えや「入れるかどうか迷う」等、考えのずれを明確にすることで問題意識へとつなげることができた。

③教材の中に描かれている問題

主題名：みんなが気持ちよく過ごすために 教材名：かぼちゃのつる（日本文教出版）【節度、節制】（第1学年）

子どもの
実態

子どもは、生活科の授業であさがおを育てる経験をしている。毎日のお世話をとおして、あさがおが日々成長していることを喜んだり、もっと大きくなってほしい思いをもったりしながら大切に育ててきた。また、あさがおと自分の成長を重ねて、一緒に大きくなっていることに気付いている子どももいる。

問題意識をもたせる導入の工夫

- ① あさがおの写真を提示し、お世話をするなかで感じてきた、のびのびと成長することのよさを引き出すことができるようにする。
- ② 教材の挿絵を提示し、あらすじを伝えることで、かぼちゃがわがままなことや自分勝手な行動をしていることに気付くことができるようにする。
- ③ 「あさがおさんと一緒に、ぐんぐん伸びるのは気持ちがよいからいいのではないかな。」と問い、あさがおとかぼちゃの成長を比較させることをとおして、問題意識をもつことができるようにする。



あさがおの写真を提示することで、あさがおを育てたときに想像していた成長を喜ぶ気持ちと関連付けて考えていた。その後、教材に描かれているかぼちゃの自分勝手な姿とのびのびと成長することの気持ちよさを比較することをとおして、問題意識へとつなげることができた。

(2) 子どもが学びをつなぐための授業の展開

<子どもが学びをつなぐための問い返しの在り方>

T：自分が使ったものは自分で片付けましょうと（登場人物が）言っていたけれど、どうして？
 C：次の人が困るから。
 C：次の人に気持ちよく使ってほしい。
 C：人に任せるのではなくて、みんなで片付けた方がよい。
 T：みんなで片付けなくても、けんじくんみたいに気付いた人がしてもきれいになるよ？
 C：みんなで片付けた方が、みんな気持ちよくなる。
 C：みんなで一緒にした方が早く片付くよ。
 C：自分でしないと成長しないし、大人になって困る。

【実際の授業の発言記録】

【左図】は「節度、節制」について考えていく授業を第1学年で行った際の授業記録である。

教材のなかに出てきた「自分が使ったものは自分で片付ける」という言葉の理由を問う発問を行った。発問に対しての子どもの発言のなかで、「人に任せるのではなくてみんなで片付けた方がよい」という考えに対して、下線のように問い返しを行った。そうすることで、他者と生活するうえで大切なことや協力することのよさ、一人一人が責任をもって片付けることが成長につながること等の価値につながる多様な考えが引き出された。

<子どもの思考を整理するための板書の工夫>

教材の内容を基に思考を整理するための板書



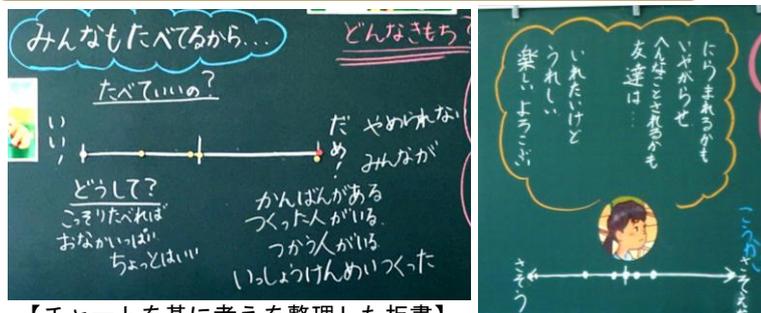
【教材の場面や登場人物の関係を分かりやすく提示した板書】

【写真左】は、教材の場面について、登場人物の行動が連鎖していることが分かるように挿絵を提示し、矢印を使って示した。

【写真右】は、登場人物同士の対立している気持ちを挿絵と吹き出しを使って示した。

挿絵や矢印等を使って黑板に整理することで、道徳的価値のよさや登場人物の気持ちに共感する姿が見られた。

多面的・多角的な思考を整理するための板書



【チャートを基に考えを整理した板書】

発問に対して相反する気持ちや行動が考えられる際には、チャートを活用して板書に整理をした。チャートを基に、自分の考えを明確にし、理由を仲間に伝えることで、活発に話し合ったり、仲間の考えを基に、自分の考えを問い直したりする姿が見られた。

また、仲間の考えと自分の考えを比較し、価値を実現する難しさや価値のよさを理解するための手掛かりとしても生かされていた。

今年度の研究のまとめ

1 「学びをつなぐ」姿を実現するための学習指導の在り方

(1) 問題意識をもたせる導入の在り方

- 子どもの経験や実態を基に、導入の手立てを考えていくことで問題意識につながる。
- 多様な価値観が生じる場面を導入で提示することで、今の価値観を一度立ち止まって考えるきっかけとなり、問題意識につながる。
- ねらいを基に、教材と子どもの実態をふまえた導入の工夫が子どもの切実な問題意識へとつながる。

(2) 子どもが学びをつなぐための授業の展開

<子どもが学びをつなぐための問い返しの在り方>

- 子どもの発言を基に問い返しをすることで、考えが深まったり、多面的・多角的な見方に発展したりする話合いへとつながった。
- 応答予想で考えておいた問い返しのみに縛られず、子どもの発言に対する柔軟な問い返しが必要である。

<子どもの思考を整理するための板書の工夫>

- 挿絵や矢印、チャート等を活用し、意図的な板書を行うことは、子どもの思考の整理へとつながる。